

Title	「からかい」の相互行為的達成：「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	日本語・日本文化研究. 2013, 23, p. 129-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26924
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「からかい」の相互行為的達成 —「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法—

千々岩 宏晃

1. 「あなたに関する知識」と研究の目的

1.1. 日常の中の「あなたに関する知識」

人は他の人に関する知識を持っている。そして、日常的にその知識を示している。コーヒーを毎日飲む友人に対して「君ほんとコーヒー好きだよ」と言うこと、猫が好きな相手に対して「猫好きならあそこに行くべきだよ」と言うことは、その一例だ。このように人々は会話をしている「あなた(=聞き手)」についての何らかの知識を持っており、人々はその「あなたに関する知識(以下、「あなた知識」と略)」を示す発話をする。

これらあなた知識を示す発話データを収集する中で、それらは4つの行為の種類¹として記述できることがわかった(千々岩 2013)。本稿では、その中でも、あなた知識が【からかう】²ことにどのように用いられているかを分析・記述する。なお、本稿の【からかい】は、「会話参加者のうちの一人が、別の参加者の嫌がるものを出すことで、その拒絶反応を二人で楽しむこと」である。

1.2. 研究目的

本研究の目的は、会話分析の手法を用いて、以下の3点を示すことである。

- ① あなた知識を示すことで行われる【からかい】は、しばしば、別の行為(【申し出】や【助言】など)の手続きを借用すること。
- ② あなた知識が、【からかい】を行う中で、聞き手(=あなた)にとって反有意(=嫌いな、苦手な)なものを選ぶリソースになっていること。
- ③ あなた知識を用いた【からかい】が組織化された相互行為であること。

2. 先行研究

本研究は「あなたに関する知識」を用いた【からかい】の研究である。よって、本章では、【からかい】、並びに、「あなたに関する知識」がこれまでの(主に会話分析)研究の中でどのように扱われて来たかを概観し、解決すべき研究方法論上の課題を明示する。

2.1. 日常における「遊戯性」に関する先行研究

20世紀初頭の社会学者ジンメルは、社会学者として初めて、人々の社会的生活の社交性(遊戯性)の側面への注目した。ジンメル研究者の菅野(2003)によれば、ジンメルは社交を

「関係そのものを楽しむ関係」と定義している。さらに、その中には「遊戯性(playfulness)」が含まれるという(菅野 2009)。

日常の「遊戯性」に関する会話分析の研究には、例えば、Schegloff(2001)がある。シェグロフは、発話のターン(turn)冒頭の”no”が、単なる否定や不同意ではなく、冗談(joke)から真剣な話(getting serious)に移行する際の手続き⁴に利用されていることを示した。また、Drew(1987)は、からかい(teasing)に対する真剣な表情(po-faced)と連鎖構造から、そのからかいが非難や賞賛、自慢に聞かれうる事、また、それが常軌を逸した「やりすぎ」のマーカーになっていることを示した。大津(2004,2007)は、Brown&Levinson のポライトネス理論の観点から、冗談内のスタイルシフトや「遊び」での対立構造の特徴を記述している。

しかし、現状では①英語先行研究が英語の言語形式に着目していること、②冗談の受け手に関する記述、特に、からかいをからかいとして受け取らない否定的な反応を研究対象としていること③日本語でのからかいの研究が少ないこと、④人々がどのような事をリソースとして他者を「からかって」いるのかに関する一貫した記述がないこと、などが「遊戯性」を研究する上での課題になっていると考える。

2.2. 聞き手と認識(epistemic)に関わる先行研究

参与者の知識(認識)上の秩序(epistemic order)の会話分析研究は、評価の行為連鎖の中で言語形式を中心としたものが盛んに行われている(eg.ヘリテッジ 2008, Hayano2011, Heritage 2012)。例えば,Heritage(2012)は, ”Are you married?(結婚してますか)”と, ”You’re married, aren’t you?(結婚しましたよね)”では, 前者のほうが後者よりも聞き手の婚姻状態についてより知識が少ないこと([K-]であること)を示しており, 同じ内容(婚姻状況を聞くこと)でも, 言語形式によって知識の勾配(epistemic landscape)を示すことができることを指摘している。また, Hayano(2011)は, 【評価】行為の発話の発話末の「ね」(ex.この魚美味しいね)が, しばしば, 知識上の優位性(epistemic primacy)を示すことを明らかにしている。

だが, 文法的リソースは, 指摘されてきたとおり, 分析者を惑わせる(西阪 2008 p. 9)。参与者の相互行為分析には, その発話がなされた連鎖⁵上のポジション(位置)と, コンポジション(内容)を観察し, 何が「達成」されているのかを分析, 記述する必要がある。

例えば, 戸江(2011)は, 言語形式に依存しない形で, 子育て場面の会話の中から, 親 A が別の親 B の子どもについて例えば[親 A 「説明促し」→親 B 「知識アクセスの主張」]という連鎖を行うことによって, 親 B が子どもへの説明責任(accountability)を果たし, 親のアイデンティティを示す様子を描き出した。

このような戸江(2011)の研究のほか, 知識上の秩序の問題を, 会話分析的, かつ, 言語形式的以外のアプローチを用いて記述したものは, 一つの出来事に対してあなたからの情

報を引き出すために、わたしが持つ限られた情報をいう(my side telling)ことで、あなたに情報を提供させる手続きを指摘した Pomerantz(1980)の釣りだし装置(fishing-device)以降、管見の限り見られない。

2.3. 先行研究と解決すべき研究方法論上の課題

以上から、本稿で解決すべき方法論上の課題が明らかになった。以下にまとめる。

- ① 日本語母語話者の日本語使用を分析すること。
- ② 遊戯性を分析する際、からかう人、からかわれる人と分けて分析するのではなく、二人がどのように【からかい】を達成するかという観点で分析すること。
- ③ データ群を、言語形式からではないアプローチによって分析すること。

3. 研究対象・研究方法

3.1. 研究対象の概要

本研究の対象となるデータ群は、主に友人⁶同士での雑談から抽出された、「あなた知識」を示す発話とその前後の会話（以下、断片）の音声データ・録音データ及び、それを転記したもの（以下、トランスクリプト）である⁷。雑談の参加者を、友人同士に限ったのは、対象の性質上、初対面での会話ではあなた知識の利用は困難であると予測されるからである⁸。

3.1.1. 本稿における「あなたに関する知識」

本稿で取り上げる、「あなた知識」を示す発話は、あなたの”好み”に関するものである。

断片1. トマトサラダを作ってあげる

→	036	Y:	[と:、あわかった] (.) トマトサラダを作ってあげるわ。
	037	A:	° はいいい:° それはいい。 ((要らないという音調)) ((Aはトマトが嫌い))

断片1で、YはAに対して、Aが嫌いなトマトサラダを、作る料理の候補として【申し出】ている。本稿の分析対象は、このような”あなたが嫌いなもの”を示す発話である。

先んじて述べておけば、哲学者・社会学者の Schutz(1973)は、生活史の違う個々人が、世界から何を有意味に切り取るか、ということをも「有意性(Relevance)」⁹という言葉で表している(片桐,1982 p.94)。ある人にとって動物の猫は興味をかきたてるものであり、有意(Relevant)な存在だが、別の人にとっては、それは他の動物を何ら変わらない非有意(Irrelevant)な存在だろう。大雑把に言えば、ある人にとって「有意なもの」とは、「人々が良し悪しにかかわらず、世界のなかから選び出し関心を示すもの」である。シュッツは更に、人々がそれぞれ個別に持っている有意性の集合を「有意性構造(Relevance Structure)」という用語で説明する。

言い換えれば、好みに関するあなた知識がある事は、世界の何があなたに関係があるのかを知っていること、つまり、あなたの有意性構造の一部を知っていることでもあるのだ。

なお、本稿で有意性の持つ好き/嫌いという二義性による議論の混乱を避けるため、その人が好ましいと思うものを「有意」、好ましくないものを「反有意」、その人が関心を示さないものを「非有意」と呼ぶ。

3.1.2. 分析対象のデータ群

本稿での分析の対象・断片の抽出元となる雑談は、大きく分けて以下の二種類がある。どちらのデータ群も、断片を提示する場合、先だって分析に関係する背景知識を示す。

A) 電話会話コーパス”CallFriend”¹⁰を用いた友人同士の会話(30分×35=計約18時間)

ペンシルバニア大学が中心に集めた電話会話のデータを用いたコーパスを元としている。ペンシルバニア大学が日本語の母語話者同士で会話をしてくれる人を募集し、「通話料と謝礼を払う代わりに、友人との会話を録音させてほしい」と依頼し、録音したものである。断片の前に「CF」と記した。

B) 著者自身が主に2012年に採集した、録音・録画(約10分～約4時間:計約50時間)。

参与人数は2人で、対面、あるいは、インターネット回線を利用した通話¹¹での会話。

主に稿者の知人を中心に、2010年から、事前に会話参加者の口頭並びに書面での許可を得て採集された会話データである。参加者は主に大学生の雑談である。参加者は固定されておらず、録音と録画が混在している。データ参加者のほとんどは知人であるため、可能な場合、背景知識に関する聞き取りも断続的に行った¹²。

3.2. 研究方法

分析方法に会話分析(Conversation Analysis, 以下, CA)を用いる。CAは人々の方法上の秩序を記述するエスノメソドロジー(Ethnomethodology 以下, EM)の研究方法の中で、相互行為としての会話を対象とし、会話秩序において蓄積のある、1970年代以降「EMから発展してきた最も一貫したリサーチ・プログラム」(椎野 2007)である。

3.2.1. 分析手順

具体的な分析手順は、次のとおりである。

1. 録音・録画された雑談の観察と、あなた知識を示す発話の抽出
2. ターゲット発話の周辺を文字化し、音声・動画と合わせてデータ群を作成
3. ターゲット発話の連鎖環境を参照しながらの行為の記述
4. データ群を類型化し、【からかい】が行われているデータの分析・考察

4. 分析と考察

4.1. あなたの嫌いなものを用いた【からかい】

ったことが明らかにされる。では、047の【提案】は、何をしているのか。

047の時点で、それは候補の【提案】というより、【提案】の候補をKZにとって反有意な(=嫌いな/苦手な)アイテムにした【からかい】であった、とするのが、妥当な記述だろう。KZの049から051の応答は、彼がそれに浅からぬ因縁を持っていることが観察可能だ。48の「絶対に」という強調の表現、また、「ㄹ」で表される笑いを含んだ音調(Smiley Voice)は、047が【提案】の形を借用した【からかい】であると理解し、それを遊戯性を帯びつつ【拒絶】¹⁴してみせている。また、4.2節で詳しく論じるが、もし仮に真剣に、あるいは普通に【拒否】してしまえば、047が遊戯性を帯びていたことを無視する事になってしまうことにも、注目しておきたい。

次の断片も同様に「あなたの嫌いなアイテム」が、何らかの行為と「ちぐはぐ」に用いられている例である。YとAの二人がインターネット回線を使用した電話をしている。YとAは高校時代からの仲のいい友人である。YはAの実家には行ったことがないことが確認されたあと、Aは025で「引っ越し」するかもしれないと述べる。

断片3. [トマトサラダを作ってあげる]

025	A:	あと一年ちょっと以内に来ないともう引っ越しちゃうよ?(.)たぶん.
026	Y:	え(.)ㄹ呼んでよ.:ㄹ
027		(0.5)
028	A:	↓う↓:↓:↓:↓ん(0.4)ㄹどうしようかな::ㄹ
029	Y:	ええっ.
030		(0.2)
031	A:	ahh(.)オムライス作ってくれたら:,いいけどな:: (期待を含む声)
032	Y:	あ::いいよ.それぐらい作るよ.
033	A:	あhhㄹじゃあオムライスとh:h:h:,ㄹ
034	Y:	う[ん
035	A:	[hhㄹ[(. . .)と::],
→ 036	Y:	[と:,あわかった](.)トマトサラダを作ってあげるわ.
037	A:	°はいいい:°それはいい. (要らないという音調)(Aはトマトが嫌い)

026のYは、Aに家に誘うことを【行為要求】する。それに対して、028の答えは非選択好(dispreferred)応答である。029が驚いているのもそのためだろう。それに対し、031でAが出すのは、家に誘うための条件である。つまり「オムライスを作ってくれたら、家に来ても/家に来るように誘ってもいい」というわけだ。

この【条件提示】が、真剣な【条件提示】ないことは、音調から明らかだろう。まず、028の「どうしようかな::」は、笑いを含んだ音調であり、これからの発話が真剣ではないこと(遊戯性を帯びていること)を投射¹⁵(project)する。031の声も、期待が含まれたような(ワクワクした)音調である。このことから、これが真剣なものではなく、遊戯性を帯びていることはYにも観察可能である。

032でのYの応答は、Aの提示した条件をあっさりと受け入れる。「それぐらい作る」というのは、それが容易であるように聞かれうる。そしてそれは、031が投射した遊戯性をキャンセルするデザインになっている。言い換えれば、遊戯性を無視して冗談に乗らず、

あっさりとそれを真剣な条件提示として受け入れているのである。

それに対し、033はすぐに「じゃあ」と笑いを含んだ音調でさらに遊戯性を投射しつつ、「オムライスとXX」と、更に別のアイテムを条件に設定することで、家に誘う条件を【つりあげ】ようとしている。

それに対し、036でYが行うのは、相手の嫌いなトマトサラダ(=あなた知識)を用いた【申し出】である。つまり、032で投射された「オムライスとXX」という統語的につながる形で、相手が絶対に条件に設定しないであろうものを自ら作ると申し出るのである。

ここには①「相手が絶対にその申し出を受け取らないであろう」ことがYにとって予測可能となっていること、②Aが投射した遊戯性を受け取ったことが、同時に含まれている。Aにとっても、Yにとっても、絶対に受け取られない【申し出】は、相手が嫌がって受け取らないのがYに予測可能、という点で、通常の【申し出】とはいえず、【申し出】という手続きを用いて、申し出られるアイテムを反有意なもの、YがAを【からかって】いるのである。

4.1.2. 考察

このように、「あなた知識」は、相手が嫌いなものや、相手にとって忌々しいもの(=反有意なもの)を出すことによって、相手を【からかう】ことに利用されている。例えば小学生が「カエル嫌いの子」に、「いいものあげる」といった後、手を開いて中のカエルをみせる、というのも類似のプラクティスのように思う。その時、まさに相手を【からかっている】と記述できる。

しかし、あなた知識は、何も相手の反有意なものばかりではない。相手の有意性(例えば好きなものや興味のあるもの)についての知識は、例えばプレゼントを選ぶという活動の達成に不可欠であるし、あるいは、【誘う】とき誰を誘うか、というレベルで言えば、その選択に相手の持つ有意性構造が関わってくることは容易に想像が可能である。例えば、映画嫌いを映画に誘う、ということは明らかに有意性構造を無視しているか、あるいは、有意性構造を知らないか、または、「映画嫌いにとってもいい映画を見せて説得し、映画好きにさせよう」といったような【説得】の行為など、通常【誘い】として想起するもの(【誘い】のプロトタイプ)とは異なる。

とすれば、相手の有意性構造を知っていることは、行為を魅力的にする(喜ばせる)事ができるリソースとして使われている。プレゼントなどは、まさに贈答行為が魅力的になる(相手が喜ぶ)ように、相手の有意性の構造を利用する。逆に、【からかう】行為は、反有意なものを持ち出すことで、【提案】や【申し出】を効果的に非・魅力的(=相手が喜ばないように)にする。

【提案】や【申し出】といった発話者の行為は、相手の有意なもの、魅力的なものでなされるのがふつうであろう。香水をどれにしようか迷っている人への【提案】は、彼が“好

きな”銘柄を参照するべきであるし、また、相手が自宅へ来るために料理をする、という条件に【申し出】るなら、相手の“好み”の料理を提案するだろう。しかし、以上の断片ではそれぞれ「相手に反有意なもの」を、【提案】や【申し出】のような自発的行為に載せてあたかも良い物のように”ちぐはぐ”にデザインすることで、あたかも「好ましいもの」かのように相手に差し出して相手を【からかう】のである。

4.2. 「からかい」の相互行為的達成

4.2.1. 分析

前節では、【からかい】が、行為(【提案】、【申し出】など)が本来選択すべき好みの/好きなものと、実際に選択された反有意なアイテムとの、”ちぐはぐさ”によって成し遂げられていることを見た。しかし、【からかい】は、たまたま”ちぐはぐ”なデザインをしているわけではない。本節では【からかい】の成立要件が、「相互行為性」に指向していることを示す。

まず、すでに指摘したが、発話者はたびたび、発話が【からかい】である事を予め聞き手に予測させるためのリソースを配置する。

断片4. CF [ディスカバリーは?] (断片2の一部再掲)

045	KZ:	[でもまたい-いつもの(.)ジューケーに戻ろうかと思っただけどそれもあれだから:]
046		(.)
→ 047	E:	°ふ:::° huhu! [ディスカバリー]は(h):(h)? .hh(.)hh(.) [hhhhhhh]
048	KZ:	[あ:それは絶対つけません!]
049		[[あとトミーフィルフィルガ-の[やつは絶対つけません]][(.)あん-い-命にかえても:(.)

Eの”ちぐはぐ”なデザインを用いた【からかい】は、その前に「°ふ:::°」という吹き笑いのような音と、「huhu!」という笑いが配置されていた。それで、これから言う事が真剣ではないということを投射してもいた。これは、話し手がそれを「遊戯性」を帯びたものであることを、予め示しておくことで、「これから言うことは真剣ではない」と宣言し、「これから言うことを真剣にとるな」と相手に要請することにもなっている。

さらに、【からかい】は連鎖組織上、第二ペア成分(Second-Pair Part)で相手に何らかの反応を要請している。これは、からかいが”ちぐはぐ”なデザインをしている理由になっている。次ページの断片5は、断片2の参加者が別の日に行った会話である。Aは普段パンと卵を朝食としてとっているが、味噌汁を作って食べたら「満たされた」と、イレギュラーな体験を【報告】する。ここでも断片2と同様、Aの嫌いなトマトサラダが【からかい】に利用されている。

035は、言語形式からそれが【助言】としてデザインされている¹⁶が、ここでも、その【助言】内のアイテムをあなたの反有意なもの(=あなた(A)が嫌いなトマトサラダ)にすることによって【からかって】いる。

断片5. [トマトサラダを食べるべき]

029	A:	意外と味噌汁のほうが:,(0.5)お腹いっぱいになった.
030	Y:	う:::ん.
031	A:	なんかこ↑ら↑↑:↑:栄養バランス的なものが満たされたんだろううちの
032	Y:	[huhuhuhu
033	A:	[普段(とらない)もの摂ったか(h)ら(h).
034		(2.0)
→ 035	Y:	いや:,トマトサラダ食べるべきやって.
036	A:	えっ!やだ.
037		(2.0)
038	A:	°あ°でもトマトはね最近食べてみたいな::と思うんだけどね::=
039	Y:	=うん.
040	A:	やっぱ踏み切らないよね.

この【助言】のデザインでなされた【からかい】がなされた後、036でAは「えっ!やだ。」と【助言】を【拒否】するデザインで反応している。逆に言えば、【からかい】は、【助言】のデザインを借用することで、【拒否】する連鎖上の場所(行為スペース)¹⁷を、連鎖的に次話者に与えているのである¹⁸。

4.2.2. 考察

「からかい」を「からかい」として聞かない場合、それは【からかい】ではない。例えば、いじめっ子が誰かをからかった時、その相手がそれを真剣に受け取れば、それは「からかい」ではなくなってしまう。もし仮に彼が「僕は君をからかっただけだよ」と言ったとしても、それは単に行為の^{claim}宣言や主張を行うだけに聞こえ、場合によっては「言い訳」ともとられかねない¹⁹。この【からかい】における「相互行為性(【からかい】は共同でつくり上げるものであるということ)」を我々はまさに日常で指向し、行っている。

断片3で見たように、もし047に笑いが配置されていなければ、「あなたの有意性構造を忘れてしまった」ことを表示することになる恐れもある。たとえば「ディスカバリーは？」という相手に真剣な提案として受け入れられれば、「なんだお前は、俺の嫌いなものを提案するだなんて、ひどいじゃないか。俺がそれを嫌いなことを忘れたのか？」のように、トラブルを招く危険性をはらむことになる。

更に、相手に行為スペースを与える、という点では、相互的に【からかう】ことと、一方的に【嫌がらせすること】との差を考えることができるだろう。例えば、相手に「トマトサラダ!」と言うのは【嫌がらせ】か、単にナンセンスだろう。逆に、「トマトサラダを食べるべきだ」と助言のデザインを借りることが【からかい】であることは、それを【拒否】する行為スペースが与えられるという意味で、相互行為的である。それはちょうど、「カエルが嫌いな女の子」に対して、単に「ほらカエル」と言ってカエルを見せる(【嫌がらせ】)のがナンセンスであり、「いいものあげるよ」と言って手のひらの中のカエルを出すこと(【からかい】)が相手に【拒否】を要請することが相互行為的だと感じられることと、パラレルになっている。

ここから、人々が【からかい】で相互行為性を指向していることがわかった。まとめると、以下のようなになるだろう。

- ① 【からかい】はしばしば笑い等の配置によってそれが【からかい】であることが示され、相手に【からかい】として受け取るように要請する。
- ② あなた知識を用いた【からかい】は他の行為の手続きを借用することで、相手に反応する連鎖上の位置(行為スペース)を与える。

5. 結論

以上で見たあなた知識を用いた【からかい】が達成されるためには、4つの条件を満たす必要がある。①わたしはあなたが何を「好ましくない」と思うのかという、あなたの有意性構造を知っている必要がある。②わたしは発話が「冗談」であることを示されなければならない(例えば相手を誘う笑いなど)。③わたしは連鎖上、第二ペア成分を要請する行為(【提案】や【助言】)の手続きを借用し、④あなたがそれを【からかい】として認識し、第二ペア成分の行為スペースで何らかの【反応】(主に【拒否】)をしなければならない。

例えば、いじめっ子が相手を「からかっただけだよ」と主張するとき、それは単に主張でしかない。あるいは【からかい】がまじめに受け取られてしまった場合、それはトラブルを生む結果となってしまう。だから、わたしは【からかい】が遊戯として受け入れられるための、様々な仕掛け(例えば笑いの配置)を表示させなければならず、かつ、何が【からかい】として利用可能なのか、というあなた(の有意性構造に関する)知識を持っていないなければならない²⁰。逆に、それを言われたあなたは、それが【からかい】であると受け入れなければならない。ゆえに、この「あなた知識」を用いた【からかい】という行為は、一見、日常で行われるありふれた行為でありながら、極めて入念に組織化された相互行為なのである。

【参考文献】

- 大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス：「遊び」としての対立行動に注目して」、社会言語科学 6(2), 社会言語科学会, pp.44-53,
———(2007)「会話における冗談のコミュニケーション特徴：スタイルシフトによる冗談の場合」、社会言語科学 10(1), 社会言語科学会, pp.45-55,
片桐雅隆(1982)『日常世界の構成とシュツツ社会学』時潮社
菅野仁(2003)『ジンメル・つながりの哲学』, 日本放送出版協会
———(2009)「恋愛というコミュニケーション」, 長谷正人・奥村隆[編]『コミュニケーションの社会学』, 有斐閣, pp.167-86
串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析 —「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』, 世界思想社
小宮友根(2011)『実践の中のジェンダー —法システムの社会学的記述』, 新曜社
椎野信夫(2007)『エスノメソロジーの可能性』, 春風社
千々岩宏晃(2013)「あなた自身に関する知識」を示す発話は会話でどのように用いられる

- か」, 「社会言語科学会 第 32 回大会発表論文集」, 社会言語科学会, pp.126-129
- 戸江哲理(2011)「会話における親アイデンティティ子どもについての知識をめぐる行為の連鎖」社会学評論 62(4), pp.536-53
- 西阪仰(1995)「関連性理論の限界」『言語』, 24 (4)
- (2008)『分散する身体:エスノメソドロジエ的相互行為分析の展開』, 勁草書房
- Drew, Paul(1987) “Po-faced receipts of teases” *Linguistics*, 25, pp.219-253
- Hayano, Kaoru(2011) “Claiming epistemic primacy: Yo-marked assessments in Japanese” In Stivers, Mondata & Steesig (eds.) “*Morality of Knowledge in Conversation*”, pp.58-81, Cambridge University Press
- Heritage, John(2012) “Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge”, *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1-29
- Jefferson, Gail (1979) “A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination.” In G. Psathas (Ed.) *Everyday language: Studies in ethnomethodology* (pp.79-96). New York, NY: Irvington Publishers.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Pomerantz, Anita(1980) Telling my side: “limited access” as a “fishing” device, *Sociological Inquiry* 50: pp.186-98.
- Schegloff, Emanuel A. (2001) “Getting serious: Joke→ serious ‘no’ ”, *Journal of Pragmatics*, 33, pp.1947-1955
- (2007) *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge University Press
- Schutz, A. (1973) *Collected Papers I: The Problem of Social Reality* (= 1983,1985, ナタンソン, M.編, 渡部光 [他] 訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 社会的現実の問題 [I] [II]』, マルジュ社)
- Sperber, D and Wilson, D (1995) “*Relevance*”, 2nd Edition (=1999, 内田聖二[他]訳, 『関係性理論—伝達と認知—』 研究社)

【注】

- ¹ 4つの類型とは、【話題の移行の提案】【好ましくない候補によるからかい】【わたしとあなたの差異化】【あなたの行為の前提の指摘】の4つであった(千々岩 2013)。
- ² 以下、本研究内で【 】で囲われた語は、それが行為 (action) であることを示す。ここでの「行為」とは、会話中で参加者が指向 (orient) し、行われる人間の社会的活動のことである。例えば、【挨拶】、【助言】、【依頼の前置き】、【からかい】など、発話行為から身体動作まで参加者が指向し、記述できるかぎりにおいて多岐にわたる。また、ひとつの発話が複数の行為を兼務することもある。例えば、「来週の日曜日に時間ある？」という発話は、【質問】であると同時に、【誘いの前置き】になっている (double barrel : Schegloff 2007)。ただし、この行為の構成 (action formation) についてはシステマティックな研究が立ち遅れている (Heritage 2012) ため、どのようなものを「行為」と呼び、また、別のターム (「活動」 など) を設定するのかについては未だ研究途上にある (西阪 2008 p.33)。
- ³ 本稿での「遊戯性」は、行為そのものを二者間が楽しむことを指向した相互行為的手段や要素を指す。
- ⁴ 本稿で出てくる”手続き”とは、人々が社会生活を行う上で共通に持っている行為のフォーマットのことを示している。例えば、「こんにちは」といった相手に「こんにちは」と返すことは、【挨拶】・【挨拶】という、社会生活を営む人々が何度も反復・産出可能な行為の型 (フォーマット) を持っている。本稿では、この行為のフォーマットを、”手続き”と呼んでいる。
- ⁵ 本稿で度々出てくる連鎖 (Sequence), 連鎖組織 (Sequence Organization) という概念は、

会話分析にとって基本的な考え方の一つである。会話を構成するのは数々の発話は一一つ単独に発話されているわけではない。その発話一つ一つを、いくつかの秩序だったパターンとして結びつけるのが”連鎖”である。例えば、A:「こんにちは」—B:「こんにちは」というのは「第一ペア成分」→「第二ペア成分」という連鎖パターン(隣接ペア)の一つであり、もしA:「こんにちは」—B:「((沈黙))」となれば、Bが「何も言わなかった」という行為の不在が明らかになる。そのことは、すでに、連鎖上、第一ペア成分(Aの発話)が第二ペア成分(Bの発話)に反応する場所(行為スペース(串田2006))を投射し、かつその反応を要求している、という連鎖上の制約を示している。なお、注4で述べられた”手続き”は行為の成立に焦点を当てた記述であるのに対し、”連鎖”は行為の順番に対する制約に焦点をおいている。(この問題に関する詳細な分析はSchegloff 2007を参照のこと。)

- 6 友人を、ここでは「会話参加者がお互いに相手のことを友人だと思っている」こととしている。
- 7 トランスクリプトには、以下のジェファソン式トランスクリプション記号を使用している。

[文字]	二人以上が同時に話し始めている位置を示す	=	前後の発話が切れ目なく続いていることを示す。
(数字)	数字が表す秒数の間が空いていることを示す	(.)	ごくわずかの間(おおむね0.1秒前後)があることを示す
文字::	音がコロシ延ばされていることを示す。	文字-	直前の語や発話が中断されていることを示す。
文字、	尻下がりの抑揚を示す。	文字?	疑問符は、尻上がりの抑揚を示す。
文字、	やや尻上がりの抑揚を示す。	↓文字	下向き矢印は、直後に急に音が低くなっていることを示す
文字、	発話が続くように聞こえる抑揚を示す。	↑文字	上向き矢印は、直後に急に音が高くなっていることを示す。
文字、	アンダーバーは、平坦な抑揚を示す。	文字	下線部分が強められて発話されていることを示す。
文字!	感嘆符は、弾んだ抑揚を示す。	°文字°	° 囲まれた部分 ° が弱められて発話されていることを示す。
hh	小文字のhは呼吸音を示す。	.hh	ドットに先立たれた小文字のhは吸気音を示す。
母音を伴ったh	笑っている事を表すときに、その笑いの発音がどの母音に近いかを表す	ss	呼吸音の中でも、口唇等で調節され、s音に聞こえるものを示す。sが多いほど呼吸音が高い。
.ss	ドットを先につけた小文字のsは、s音に聞こえる吸気音を表す。すすり音等。	文(h)字(h)	笑いながら発話している部分を示す。
文h字h	笑いではない呼吸音が発話に重ねられていることを示す。	!文字!	呼吸音が重ねられてはいないが、笑いを帯びた声質(smiley voice)で発話されていることを示す。
<文字>	不等号で囲まれた部分が、前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。	>文字<	不等号で囲まれた部分が、前後に比べて速く発話されていることを示す。
(文字)	聞き取りに確信が持てない部分は丸括弧で囲って示す。	(. . .)	まったく聞き取れない部分は、丸括弧の中に. . .を囲い示す。 . . . の長さは、聞き取れない箇所の長さに比例する。
(X/Y)	XかYかいずれかに聞こえるが、どちらであるか確信が持てないことを示す。	((文字))	転記者によるさまざまな種類の注釈・説明は、二重丸括弧で示す。

- 8 例えばコーヒーショップで今日はじめて見る客に、「いつものですね」と言うことは不可能だ(そういうサービスをする店は別だが)。また、知らない相手に「髪の毛切りましたね」と言われたら、我々はその人を「ストーカー」だと思うだろう。
- 9 Sperber&Wilson(1986=1999 p.143)が述べるように、「Relevance」という語は人によって定義が大きく異なるが、本稿では、関連性理論が使用する意味ではない。なお、会話分析的視点からの「関連性理論の限界」を論じたものに、西阪(1995)がある。
- 10 MacWhinney(2007)を参照のこと。(URL: <http://www.talkbank.org/> 最終確認: 2013/09/09)
- 11 ソフトフェアには「Skype」(URL: <http://www.skype.com/> 最終確認:2013/09/09)を使用している。
- 12 西阪(2008 pp.1-13)は、行為の記述を直接本人に尋ねることの妥当性を否定する。また、行為の記述はそれを観察する研究者にも開かれていると述べる。ゆえに、彼らへのインタビューは、研究者が得ることができない、分析に必要と思われる背景知識に限られるべきである。
- 13 すべての「あなた知識を用いた【からかい】」が、この連鎖を構成するわけではない。しかし、この手続きは、人々が確かにやっている「あなた知識」を用いた手続きであり、本稿はその記述である。
- 14 これ以降、【拒否】は、相手の【助言】や【申し出】に対する応答として、それを受け入れない行為を示し、【拒絶】は、相手が「あなた知識」を用いて【からかい】を行う

たことに対しての応答行為を示す。

- 15 本稿での「投射」は、発話上、連鎖上,または行為上,次に来る発話が前の発話によって予測可能になることを表す(串田 2006 の説明も参照)。
- 16 仮にこれは真面目な【助言】なのではないか,と疑問に思う読者がいるかもしれない。しかし,真面目な助言なら,朝食にトマトサラダを食べることを助言するのは,やはりおかしいように感じられる。
- 17 注 5 も参照のこと。なお,ここでの行為スペースは,前方の連鎖成分から(規範的に=手続きの)要求される物が入る連鎖上の場所,という意味である。この行為スペースには,発話のほか,非言語行動(A:塩とって→B:(塩をとる動作))も含まれる。
- 18 このことから,【からかい】にもいくつかの種類があることが明らかになる。例えば「やーいやーい,お前の母ちゃん出ベソー」という「からかい」は,連鎖的に第二ペア成分を要求しないという点で,今回の【からかい】とは明らかに性質の異なるものである。
- 19 文部科学省の「いじめの定義」の定義によれば,いじめは「いじめられた側の気持ちを重視」することがいじめの要件である。これは,「いじめ」がいじめた側ではなく,いじめられた側の問題であることを指向している点で,この件と類似する。(参考:
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302904.htm 最終確認:
2013/09/11)
- 20 相手はその言葉を聞くだけで嫌悪感を抱くようなもの,相手が真剣に憎んでいるものを,【からかい】として用いることは出来ないように思われる。人々がどのようにして,適切なアイテムを選びとっているのか,ということは,それ自体研究対象になりうる。今後の課題としたい。